| 平成３０年度 弘前市総合計画審議会議事概要（第４回） | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 日　　時 | 平成３０年１０月１２日（金）　１３時００分～１５時００分 | | | |
| 場　　所 | 弘前市役所３階　防災会議室 | | 傍聴者 | ０人 |
| 出　席　者 | 委　員<br>（１９人） | 森会長、村松委員、高島委員、杉間委員、藤田委員、島委員、清野(眞)委員、清野(智)委員、熊谷委員、前田委員、北村委員、鈴木委員、秋元委員、山形委員、石川委員、福士委員、一戸委員、青山委員、三上委員 | | |
| | 事務局<br>（６人） | 企画部長、企画課長、企画課主幹、企画課総括主査、企画課主査、企画課主事 | | |
| | その他 | | | |

## 会　議　概　要

１　開会

２　報告

各分科会の審議内容について

〇村松座長から、ひとづくり・くらしづくり分科会での審議内容について報告。

・報告内容に対し、委員からの質問・意見等なし。

〇森座長から、まちづくり・なりわいづくり分科会での審議内容について報告。

・報告内容に対し、委員からの質問・意見等なし。

３　議事

（１）各施策における成果と課題及び次期計画方向性について【戦略推進システム・移住対策】

〇主な意見等の内容は以下のとおり。

〔システム９「情報の収集分析力の高度化」〕

・二次評価案にあるとおり、検討していただけるということなので、これでよいと思う。アンケートのやり方はいろいろあり、難しいとは思うが、紙ベースだけではなく、インターネット等でアンケートをとるという方法もあるので、若い人も回答しやすい方法を考えていただきたい。

〔システム２１「市民協働、官民連携の推進」〕

・市民協働、官民連携を進めていく中で、地域の人・市民が「弘前市協働によるまちづくり基本条例」を認識していないことが多いと思う。市民へのさらなる周知が必

要。出前講座だけではなく講演会の実施等、条例に基づいて市民協働を推進するということを市からもっとアピールしてほしい。

⇒協働によるまちづくり基本条例関係事業の中でフォーラム等を開催しているが、まだ条例の浸透が不足しているというのは我々も認識している。ご意見のとおり、市民に条例が周知されるよう進めていきたい。

〔システム２３「地域コミュニティの強化」〕

・町会未加入者への対応の見える化については、今やっているような取組をぜひ進めてほしい。情報発信の方法について、広報誌に掲載するのもいいが、広報誌自体が行きわたらない場合もあるので、スーパー等で宣伝する等、引き続き検討いただきたい。町会活動は防災に関することなど、重要でありながらも、参加しないとわからない。町会でそのような活動をやっているということ自体が伝わっていないのはもったいないので、きちんと周知していただき、市民に町会の意義を理解していただく必要がある。

⇒地域のつながりが強くなれば有事の際の対応も強化されていくということもあり、市としても、地域コミュニティとして当該施策を強化しているところである。一方、地域を支える人材の育成という面からも、地域コミュニティだけではなく、仲間やグループのコミュニティを支援していくことにも今後取り組む必要があると思っている。

〔システム２６「大学・研究機関等との連携の強化」〕

〔システム２８「学生力の強化」〕

・今までにも大学との連携は進められているが、単に文書を交わして補助金を交付するということだけではなく、地域課題を把握している市がもっと踏み込んで、主体的にプレーヤーとしてプロジェクトに入って取り組んでいく姿勢を強く打ち出していってほしい。

⇒市としても、地域課題解決のため、今後もより積極的に大学と連携させていただきたい。今後は、地域と学生をつなげ、課題解決に取り組む仕組みづくりを進めることで、学生が地域の中で自分たちの考えたことを実践でき、また地域が若い視点を取り入れ、地域が若い人を育てるという好循環を生み出していきたい。

〔システム３４「多文化共生・国際交流の推進」〕

・補助を受け、海外へ派遣された学生が活躍し、地元で先輩としてモデルになるような役割を担っていただければよいと思うので、派遣後の状況調査をお願いしたい。ソーシャルインクルージョンという考えで、障害者、外国人など多様な人との共生も最近取り上げられており、これは移住しやすい環境づくりにもつながってく

るので、視野を広げて総合的に取り組んでいってほしい。

（２）地方創生関係交付金事業の評価について

〇主な意見等の内容は以下のとおり。

①弘前版生涯活躍のまち推進事業

・有効といえないと評価したのは、まだ進行中ということで様子を見たいというのと、指標の実績値をみると目標に達していないからであるが、今後も引き続き頑張っていただきたい。

・アクティブシニアの起業については賛成で、どんどん進めていただきたいが、アクティブシニアの移住が人口減少の抑制につながるものだろうか。たとえばアクティブシニアだけでなく、その子どもや孫なども一緒に弘前に移住し、企業やまちが活性化するシステムになれば有効であると思う。

⇒県外のアクティブシニアに移住していただき、地域の活性化の面で活躍してもらうのが当該事業の本筋ではあるが、社会動態の転出を転入で補うということで人口減少を抑制するものである。施設がまだできていないこともあり、正直、アクティブシニアの移住者はあまり多くない。一方、移住者や地域の子ども、ボランティアが集まりイベント等を行ったりして、これまでにない地域とのつながりが形成されているので、人口減少対策の起爆剤とまではいかないが、コニュニティ形成の面でいい取り組みになっている。今後、弘前公園の近くに新しい施設ができ、観光地隣接型という形で入居者を募集しているので、そういう取組とともに地域と移住者をつなげる取組にも引き続き取り組んでいきたい。

②都市と地方をつなぐ就労支援カレッジ事業

・事務局の説明に対し、委員からの意見等なし。

③地域クリエイターと連携した新たな担い手育成及びコンテンツ等開発事業

・市内にはまだ活用されていない観光資源があると思うので、そういうものを先に活用したうえで次へのステップアップが必要だと思う。クリエイターについても、他から連れてくるよりは、まずは地元の人材育成に連携して取り組むことが先である。人材育成は総合計画全体に関わってくるので、そういう視点で展開していただきたい。

④ひろさきライフ・イノベーション推進事業

・ひろさきりんご産業イノベーション推進事業にも関連する話だが、「イノベーション」という言葉の考え方が少し古いと感じる。イノベーションは特定の産業の中で起きるものではなく、りんごと観光、りんごと健康など、特定の産業や業界を飛び

越えて、複数の産業を融合して生まれる新しい形を「イノベーション」ということが最近多くなっているので、どこかのタイミングで、複数の産業が融合して弘前の新しい価値を生み出すというときに「イノベーション」という言葉を使用するように修正していってほしい。

⇒当該事業は、健康医療産業の創出と市民の健康増進を大きな柱として掲げており、産業目線だけでなく健康増進の両方から取組を進めているが、どうしても特定の分野の取組に見えてしまう部分もあるので、言葉の使い方は今後検討させていただきたい。

・医療関係、リハビリ関係のことについて推進しているということなので今後も頑張ってほしい。中央の方では、このような医療の環境が既に整っており、中央と地方の格差が出ている。弘前は医療に強いまちであるので、福祉関係のことも含め、今後も進めていただきたい。

⇒ロボットスーツ HAL を弘前大学医学部附属病院に導入したときは、北東北初であった。東北圏が遅れているということもあるので、今後も積極的に進めていきたい。また現在、スマートフォンで CTI 画像や MRI 画像を医師の間で共有できる仕組みづくりを大学病院と協働で進めている。リハビリだけでなく、救急医療体制の強化も進めているが、それについても東北は遅れているので、積極的に進めていきたい。

⑤ひろさきりんご産業イノベーション推進事業

・AI というのは農業情報科学という意味でよいのか。

⇒人工知能の AI ではなく農業情報科学の方の AI である。ベテランの農家がりんごの木のどこを剪定しているかという情報をたくさん集めて、初心者が勉強するためのシステムづくりをしたり、農協と連携して、気温や湿度、赤外線などの環境の条件がりんごの糖度にどう影響するかの情報を収集し分析している。

・まず、りんご作りに魅力を感じてもらうようにすることが大事ではないか。担い手が不足している原因を調査し、学校教育などで子どもにりんご産業の魅力や知識を伝えることが必要である。

⇒当該事業は、新規人材育成として、りんご公園で初心者向けのこれまでよりもハードルの低い研修を行っているが、ご意見のような、それより前の教育も必要で、子どもたちが早いうちからりんご産業に携わるということも必要だと感じた。

⑥弘前さくらまつりにぎわい創出事業

・VR、AR というのは時空を越える技術で、それを活用すれば 10 年前、100 年前の桜がどうだったか見ることができる。今後迎える観桜会の 150 年、200 年を考えると、100 年の時はこういう桜があった等の比較が VR や AR でできるので、単

にスマートグラスでバーチャルリアリティーを楽しむだけではなく、時空を越えられる技術という発想で、今後もデータを残して、50 年後も 100 年後も楽しめるようにしていただきたい。

⇒100 年前の観桜会のデータを今見てみるとすごく楽しめるので、そのように 50 年後、100 年後にもデータを残していけるような取組を考えていきたい。

・さくらまつりの集客を増やすのであれば、桜の鉢植えにこだわらずに、より集客できる取組を検討していただきたい。事業が現在進行形で進んでいるということなので、今後、よりいいものになるよう進めていただきたい。

⇒当該事業は企業版ふるさと納税の事業として、企業がどんな取組であれば寄附してくれるかを考える必要があり、寄附企業の見込みがないと国に申請できない制度でもあるので、桜の鉢植え以外にも企業が寄附したいと思うような取組を考えていく必要がある。

・温暖化によって、ゴールデンウイーク中にさくらまつりの集客をすることは今後難しくなってくるので、桜の鉢植えもいいが、大枠としては、ソメイヨシノだけではなく弘前のシダレザクラの魅力を積極的に PR していく必要がある。また、有料区域の切符売り場の列を普通のカラーコーンを配置して整理しており、せっかくの石垣の背景とマッチしないので、検討する必要がある。

・昨年度、ふるさと納税で桜の木のオーナーになり、一年間企画があるということで楽しみにしていたが案内がなかったという話を聞いたことがある。りんごは一年を通して作業体験ができるが、桜も一年を通した楽しみ方があるのではないか。

⇒担当課にしっかり伝えていく。

〇外部組織としての事業効果評価案は、事務局案のとおり承認された。

4　閉会